

## OPENING PHASE

### Opening 01 キミに拒否権は、ない

Scene Player 花島田英達

照明の落とされた薄暗い空間。ぼんやりと光る眼前を凝視しながら、両手の指を動かす。  
弱パンチから対空蹴り、バックステップでガード 数瞬の攻防の後、轟音と光が閃いた。

英達：まずは侵食率を……（ダイスを振る）5つ。

GM：うい。というわけでハンドアウト通り、ゲーセンからスタ ト！

英達：はいはい。格闘ゲームに動いそんでいることでしょう。ガチャガチャ……！（操作音）

GM：（ニヤリ）じゃあ、判定してもらおうか。

英達：……ま、マジで……？（笑）

譲：（唐突に）よし、いいぞ……反射神経には問題ない……！（笑）

何故、アンタがいるんだ。ここに。

GM：（譲の発言を流して）運動 か 精密作業 の好きな方でどうぞ。

英達：振れるダイス多いし、ここは 運動 だね。（ダイスを振る）えーと、一番高いの？ だと9。

GM：（ダイスを振る）……う、それはこっちが負けたな。

ガードキャンセルからの超必殺技で、ミリ単位での均きんこう衡を続けていた体力ゲージが大きく動く。  
その一瞬で、勝敗は決していた。

「K.O.!!」無機質な合成音声が響くと同時に、英達の画面上に踊る“YOU WIN !!”の文字。  
快哉かいさいをあげながら筐体きょうたいの陰から顔を出すと、向かいに座っていた綾華と目が合った。

英達：っしやあああ！

GM：向かい側の筐体から綾華が顔を出して「むううっ」という顔をしています（笑）

英達：フフン、また俺の勝ちだなっ（ニヤリ）

GM：「やっぱり三ヶ月もあると腕が衰えるなあ……英ちゃんに負けちゃうなんて、悔し っ！」

英達：そんなん、俺だって三ヶ月振りだ ッ！（笑）

GM：……（笑）。ええと これは宇佐美さんも知っていることですが。彼女、咲島綾華は交通事故に遭い、全治三ヶ月の重体で入院していました。ちょうど最近治ったところで「快気祝いに連れてってくれるわよね!？」と英達を引きずってきた、という感じです。

英達：なるほど。

GM：ぶーぶー言っていた彼女ですが、ふと機嫌を直して懐から綺麗な二枚のチケットを取り出します。そしてピシッとあなたの目の前に突きつけるのですよ。……読めないくらい目の前に。

英達：「ああ……あ？」と言いながらちょっと仰け反ります（笑）

---

何故、アンタが～ もちろん、厳密には譲は登場していない。キャラの口を借りたヤジというか、合いの手に近いものである。GM もそれが分かっているため、特に何も言わず流しているのである。

GM：チケットの表には「Project Judgement」と書かれてありますね。

英達：……何だ、コレ。

GM：綾華は「招待されちゃった！ やっぱ苦あれば楽ありよね」と言って喜んでます。

譲：苦？ ……ああ、交通事故に遭ってたもんな。

英達：その手からチケットをピッと取ってしげしげと眺めますが。

GM：まだタイトル名に（仮）と付いているような段階の、ゲームの企画名のようなですね。そのクローズドテストの招待チケットです。日時なんかも書いてありますね。

英達：ふむ。（綾華に向かって）……で？

GM：彼女はニッコリ笑いながら「英ちゃ～ん、**もちろん**今週の日曜日は空いてるわよね？」（笑）

英達：（即座に）え～……今週の日曜（棒読みで）ああ残念、道じよ……。

GM：（言いかけたのを<sup>さえぎ</sup>遮って）「**んん～？ 空・い・て・る・わ・よ・ね!?**」

**満面の笑顔で脅迫しているのはNPCなのだが、何故かGMも満面の笑顔である。**

英達：えー……、いやホラ、俺だって空手の練習しなきゃいけないしさ……、なっ？

GM：無言の笑みのまま、チケットがズズズズッと迫ってきます（笑）。

英達：徐々に徐々に後ろに下がりながら「から……空手、が………ハイ」と受け取る（一同笑）。

譲：尻に敷かれてんなあ（笑）。……情けない、情けないぞ**我が“熊”**よ！

GM：そんな、勝ち気で**ちょっぴり**強引なあなたの幼馴染みですが。

**「ちょっぴり」どころじゃないだろう。**

GM：満面の笑顔で「じゃあ土曜の夜八時に駅前ね～！」と書いてありますね。

英達：へっ!?! 土曜ッ!?!

GM：チケットにもそんなことが書いてあるね。……説明も兼ねて前日から、と。

英達：（聞こえないように小声で）……一泊二日もアイツの面倒見るハメになるのかよ……。

GM：綾華は**聞こえないフリ**をしてニコニコ笑っています（笑）。

英達：チケット片手にフルフル首を振っているよ。……悲しそうな顔で（苦笑）。

GM：180センチの身長がやけに小さく見えるんだね（笑）。じゃあ、そんな感じで。

**綾華のワガママに付き合わされるのは何度目だが、もう数えるのも面倒くさい。**

**いつも通りまったく効いていないようなので、<sup>はかな</sup>儂い抵抗を 振っていた首を止める。**

**ま、ここんところずっと、道場で手合いばかりだったしな。**

**たまには<sup>ゲーム</sup>架空の対戦も悪くはない。……あくまで「たまには」だが。**

**喧いて、英達はもう一度、大きなため息をついた。**

## Opening 02 ネットさえあれば、締切さえも越えていける

Scene Player 宇佐美桐子

休んでなどいない。今だって、ひたすらに手を動かしている。  
自分はよく頑張っている……そのはずだ。  
だが、しかし。

努力だけではどうにもならないものもあることを、改めて彼女 宇佐美桐子は思い知らされた。

桐子：侵食率は……と（ダイスを振る）、4上がりました。

GM：了解です。あなたは編集部のデスクにいますね。

桐子：ちょうど取材が終わったところで、パソコンのキーボードをペケペケ叩いています。

GM：だが、しかあし。……ちょっと、原稿が足りませんねえ（一同笑）。今取材してきた件だけでは、締切までに必要な記事の本数を書くことは出来なさそうです。

桐子：……そのことは頭から閉め出して、とりあえずこの文章を仕上げることに集中！

GM：おう！ ……締切は来週だがな（笑）。そんなところに、呼び出し音が鳴りますよ。

桐子：携帯？

GM：うん。液晶のところには「咲島綾華」と表示されているね。

桐子：うっ……忙しいのに（涙）「はい、もしもし？」

GM：「あ、もしもし～？ 桐子姉～？」三ヶ月振りの電話ですね。

桐子：あ、じゃあ「もう身体の調子はいいの？」とか。

GM：「だいじょぶだいじょぶ、すっかり元気になったもん～！」

譲：後ろから耳覚えのあるピコピコ音が（笑）

桐子：こら、治ったばかりでゲーセンなんか行くんじゃないの！（笑）

GM：綾華は「ええ～……だって英ちゃんが快気祝いに連れてってくれるって言ったし！」と（笑）

英達：（小さく）え、俺のせい？ 俺のせい？（笑）

桐子：まったく英達は……止められないのかっ。

携帯の向こうにいるであろう少年をじろりと睨みつつ呟いていると、綾華が本題に入った。

何でも、“Project Judgement”なるゲームのテストプレイに招待されたのだという。

全く知らないということを綾華に揶揄されながら、桐子は締切までに必要な原稿数を数えていた。

「ね、面白そうだと思わない？」

……しかし、綾華の問いかけに頷いたのは、逼迫した状況からだけではなかった。

あたしが全然知らないなんて、どういうゲームなんだろう？ 興味わくなぁ。

GM：……ワクワクしてますね（笑）。そんなあなたの心を読んだかのように、綾華が電話の向こうから「桐子ねえ、行きたい？ ……行きたい？ テストプレイっ」と問いかけてきますね。

桐子：え、行っていいの!?

GM：「残念でしたぁ～、もう予約済みー。英ちゃんがどぉおしても行きたいって言うからっ！」（笑）

---

「行きたい？」 同行者が英達であることを桐子のプレイヤーは知っている。無論、却下するのも分かっていたが、GMと桐子のプレイヤーは自然な流れを維持するために敢えてこの会話を行った。

一同：嘘だぁぁ　　ッ！（爆笑）

何て言うか、もう.....<sup>ヒロイン</sup>綾華の性格が大惨事である。

桐子：（再び携帯を睨んで）.....あんにゃろっ。仕方ない、携帯を肩に挟んでメモをとりましょ。

「えーと、名前は“Project Judgement”ね？ 他には詳しいことは？ 日時とか、場所とか」

GM：えー、日時は今週土曜の夜八時。会場は書いてありませんが、F 駅前に集合だそうです。

桐子：胡散臭ッ.....。

譲：（ぼそぼそと）多分、リアル鬼ごっこだよな、これ。

GM：あとはまあ、どこの会社が主催してるとか、そういう情報を教えてください。

譲：主催会社はファルスハーツ・エンターテイメントとか書いてあったりは.....（一同笑）

秀真：分かりやす過ぎるだろソレ！（笑）

GM：さすがにそんなことは書いてないな（苦笑）

桐子：とりあえず、情報ありがとう！ .....いや～実はね、記事足りなくて困ってたのよねっ。

GM：「へえ～.....じゃ、この咲島綾華さんが桐子ねえの役に立つような情報、ゲットしてきちゃうからさっ！ 記事が出来たら何かオゴってよね」

譲：ちゃっかりしてんなぁ（苦笑）.....というよりは、しっかり、か（笑）

桐子：締切まであと一週間もないしな。「いいよ、ご飯なんていっくらでも！ .....一人分だけね」

GM：「うんっ」

英達：（携帯の向こうで）.....しくしく.....。（オゴりの対象外）

GM：ま、そんな感じで電話が切れたところで、次のシーンかな。

桐子は切れた携帯を元の場所に放り込むと、今書き取ったばかりのメモを指で弾いた。<sup>はじ</sup>

“Project Judgement”、.....今のところ霧に包まれた、謎のゲーム。

「うんっ.....いい話が来たじゃないの」

そう言ってにんまりと笑みを浮かべると、彼女は再びキーを叩き出した。

\* \* \*

譲：次が鶴来さん（PC）.....ということは、オープニングでもトリは俺？（笑）

GM：うん。さすがにエンディングは（PC がトリだから）違うけどね。

GMの一言に目を見開き、口を開けて絶句する譲のプレイヤー。

GM：何だよ、その<sup>きょうがく</sup>驚愕の顔は！（一同大爆笑）

譲：だって！ オープニングの雨の中で絶叫からシナリオの締めで墓参りまで考えてたのに！（笑）

GM：知るかぁあ！（笑） とにかく次っ、早く侵食率振っちゃって！（笑）

---

**大惨事** シナリオでは桐子に「デート？」などとからかわれると「ち、違うってば！ これは.....その、あれよ！ 強敵と書いて“とも”ってやつ！」と叫ぶようなツンデレ系ヒロイン.....になる予定であった。しかし.....これではタダの自慢野郎である。どこで間違っただろう？（苦笑）

**リアル鬼ごっこ** 山田悠介氏のホラー小説。主人公・佐藤翼は、ある日国王が出した「全国の“佐藤”姓を皆殺しに」との発表により、生死を懸けた“鬼ごっこ”で逃げることになる、というもの。